Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報　第６号　2008/3/25 発行

聖地の城再建

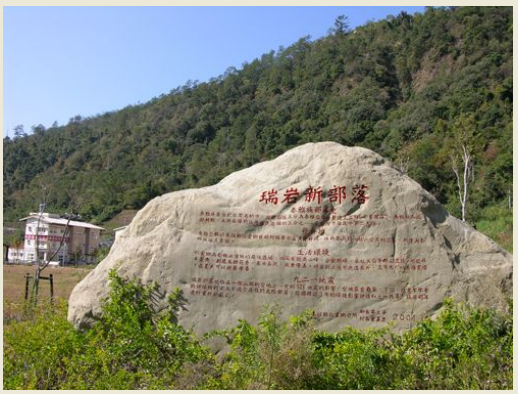
―南投県仁愛郷瑞岩部落

文／林琮盛

瑞岩部落は山々に囲まれた天空の城、伝説ではタイヤル族発祥の地だ

仁愛郷発祥村と力行村を貫いて通る力行産業道路、600 余りの世帯が外部と連絡できる交通動脈だ。しかし、台風や雨に見舞われるたび、決まってずたずたに寸断される。

921 地震によって「遷村」（村落移転）問題が浮上し、一躍注目を浴びた瑞岩部落は発祥村に属しており、人呼んで「天空の城」あるいは「雲と霧の故郷」と形容される。しかし、当地の人にとっての誇りは、ここがタイヤル族発祥の地であることだ。



瑞岩部落の人たちが移転する場所に建てた記念碑

聖地 pinsbkan への回帰

言い伝えによると、数百年前、白狗大山のなかに緑濃い大渓谷があり、海抜1000 メートル余りの川床に、高さ5メートル、幅8メートルの灰褐色の巨石が屹立していた。これこそが伝説にある聖石で、タイヤルの祖先はこの聖石の裂け目から誕生したというのだ。

1998 年 3 月 26 日、私は半世紀ぶりに組織された「発祥地―pinsbkan」巡礼隊にしたがって、北港渓上流に位置するタイヤル部落へやって来た。

当時祭礼を司った林徳川牧師が、しわがれた重厚な声で祖霊に捧げる祭歌を敬虔な面持ちで献上した。その大意はこうだ。「敬愛すべき祖霊よ、あなた方の加護に

見たところ大きな震災の被害は無いが、調査で地層の危険が判明、移転を迫られた

感謝します。タイヤル族の子孫である私たちは決してあなたの教戒を忘れません。この行方知れない時代にあって、どうか私たちに力と智恵を授け、あなたの栄光を発揚されんことを‥‥」

明くる年に 921 大地震が起こり、伝統的タイヤル文化を宿したこの部落が、遷村の命運に直面しなければならないとは、その時誰も知る由がなかった。

住まいを移して故郷づくり

統計によると、瑞岩部落は地震によって8戸が全壊、15 戸が半壊し、村の民家のあちこちに傷跡を残していたが、最初の頃住民たちはさほど意に介することは無かった。しかし、成功大学防災センターが被災実地調査に訪れ、ボーリング調査の結果、山頂平地の集落周辺では斜面崩落、地盤傾斜が見られ、地層滑動の可能性があるため、「継続居住不適合、遷村提案」リストに挙げられた。

瑞岩部落の移転地は、かつて発祥部落があった場所。日本の植民地時代の初期、集団で瑞岩へ移されたが、地震により今また、昔の集落に戻ろうという考えが出てきた

遷村の話が上がったころ、二つの相反する意見が戦わされたが、政府もいち早く各種の補助制度や遷村後の将来図を示した。現実的に見ると、瑞岩部落自身 1.2 ヘクタールの面積しかなく、土地を広げる可能性が無いことは、族人たちもよく知っていた。もし公共の復興計画を通して適当な地点に土地を見つけて再建すれば、かなり広い居住空間を獲得できる。こうして遷村に同意する意見が大勢を占めるようになり、合意に達したのである。

「移転するか移転しないか、これは争論の始まりに過ぎなかった。」と瑞岩部落遷村推進委員会の現責任者である高明徳さんは言う。その後実際の事業段階になって頭の痛い問題に直面する。「どうして移転するのか？　土地はどこか？　誰が家を建てるのか？　当時は何も一切決まってなかった。」

2004 年 10 月、発祥小学校の再建が完成。南投県で最後に完成した学校で、建築設計は特色に富み、使いやすく、設備も好評だ

移転をめぐる困難

まず直面したのは土地問題だ。住民投票の結果、旧集落から 1 キロ余り離れた、面積 9.7 ヘクタールの Gonaw 平地が選ばれた。いくつかの農地を買収するため、5,000 万元余りの買収補償費と、63 筆に及ぶ土地所有権者との財産移転交渉及び土地変更手続きが必要になる。

施工会社の建築師の計画・設計によると、この土地の上に、まず 4.9 ヘクタールを開発し、139 戸の新家屋を建設する。そのため地区道路、排水溝、派出所、活動センター、村事務所、衛生室、廃棄物処理場などの公共施設を完成させる。発祥国民小学校については教育部の 5,000 万元余りの補助を得て移転地に再建、2004 年 10 月には完成している。

瑞岩の住宅再建工事は、坪当たり 4 万 3,500 元と表明された。この計算でいくと、それぞれ 1 戸当たりの価格は 240 万元近くになる。

921 重建基金会で瑞岩部落の遷村問題に長らく係ってきた蔡培彗専門員は、移転する各世帯は 75 万ないし 100 万元の補助は得られるが、100 万元近くの資金が不足することになり、住民は負担できないと指摘する。

期待は落胆へ

大部分が貧困ラインにいる瑞岩の住民にとって、融資を受けられるのはやはりごくごくわずかである。

さらに、2002 年 2 月公共工事が発注されたが、整地、道路と擁壁、排水溝とそれぞれ別の業者に分離発注されたため、1 年以上遅れてやっと完成にこぎつけた。

そして翌年 7 月家屋工事の発注時、またもや敷地の傾斜角度が大きすぎることが

わかり、加えて多くの土盛りが片付けられてないため、業者は施工できなかった。施工開始を業者と協議していたとき、七二水害と艾利（AERE）台風に遭遇し、力行産業道路が寸断し、新集落地区への橋梁が崩落し、重機や建材の進入ままならず、施工は頓挫した。

建物再建工事が 1 年余り伸び伸びになり、この間に鉄筋価格が国際市場に随伴して高騰した。業者は再見積もりの結果、坪価格５万元の上乗せがないと履行できないとし、移転世帯に対し訴訟を起こした。

2004 年 11 月には、仁愛郷長卓文華に多くの工事不正疑惑が浮上、拘留されてしまったため、瑞岩の遷村案は行き詰った。

台湾で有史以来最大の遷村計画は、次から次へ問題が発生し、混乱きわまった状態だ。そして、住民は震災後長く待たされる中で、新しい部落の未来に対する期待は落胆へと変わってしまった。

瑞岩の移転工事は既に何度も起工式をしたが、その度さまざまな要因で遅延したり中止になった。人々は失意の中でも、まだ希望は捨てていない。

祖霊の聖地を目指して

林徳川牧師は、瑞岩部落が共有する「タイヤル族発祥地」という宝を、政府はいまだ重視していないと嘆く。文化復興を推進している彼は、gaga（タイヤルの祖訓）を忘れることなく、新旧の部落の歴史をともに保持しながら、聖石の文化的地位を改めて発揚し、ここをタイヤル文化の根源に変えたいと願っている。「私たち族人が gaga を守って、祖先の教え諭したやり方で暮らせば、この地をすべてのタイヤル族人がそのルーツを求め文化を学びに訪れる聖地にすることができる。」と期待を語る。

しかし、日々の生活に追われている族人たちがこうした道を共に歩むことの難しさは、林牧師も十分承知している。しかし、容易ではないが可能性はある。遷村と同じように、創造性のある努力によってこそ、再建のチャンスは生れるのだ。

聖地の城を目指して、瑞岩人が震災という災難から鍛錬を受け、そして鍛錬の中から祖先の智恵を学び、多くの異なった意見を包み込んで、新しい未来を切り開くことを、私は信じている。

（新故郷基金会「地動的花蕊」上、2004 年から抄録）

発祥小学校にはいたるところタイヤルの文化要素が見られる。瑞岩部落は聖地の城を再建できるか、特殊な宝を持ったタイヤルの人たちの試練だ

発行／たかとりペーパードーム台湾再生計画推進委員会
日本事務局　たかとりコミュニティセンター
E-mail：office@tcc117.org
台湾事務局　新故郷文教基金会
E-mail：land@homeland.org.tw